

# 一握の砂

石川啄木

青空文庫



函館なる郁雨宮崎大四郎君

同国の友文学士花明金田一京助君

この集を両君に捧ぐ。予はすでに予のすべてを両君の前に示しくしたるものの如し。従つて両君はここに歌はれたる歌の一一につきて最も多く知るの人なるを信ずればなり。

また一本をとりて亡児真一に手向く。この集の稿本を書肆の手に渡したるは汝の生れたる朝なりき。この集の稿料は汝の薬餌となりたり。而してこの集の見本刷を予の閲したるは汝の火葬の夜なりき。

著者

明治四十一年夏以後の作一千余首中より五百五十一首を抜きてこの集に収む。集中五章、感興の来由するところ相<sup>ちか</sup>邇<sup>か</sup>きをたづねて仮にわかつてるのみ。「秋風のこころよさに」は明治四十一年秋の紀念なり。

# 我を愛する歌

東<sup>とう</sup>海<sup>かい</sup>の<sup>こ</sup>小島<sup>じま</sup>の<sup>い</sup>磯<sup>そ</sup>の<sup>し</sup>白砂<sup>らすな</sup>に

われ泣<sup>な</sup>きぬれて

蟹<sup>かに</sup>とたはむる

頬<sup>ほ</sup>につたふ

なみだのごはず

一握<sup>いちあく</sup>の砂<sup>すな</sup>を示<sup>しめ</sup>しし人を忘れず

だいかい  
大海にむかひてひとり  
ななやうか  
七八日

泣きなむとすと家を出でにき

いたく錆びしピストル出でぬ  
すなやま  
砂山の

砂を指もて掘りてありしに

ひと夜さに嵐来りて築きたる  
よ  
あらきた  
きづ

この砂山は

なに  
はか  
何の墓ぞも

砂山の砂に腹はら這はひ

初恋の

いたみを遠くおもひ出いづる日

砂山の裾すそによこたはる流木りゅうぼくに

あたり見まはし

ものい物言ひひてみる

いのちなき砂のかなしさよ

さらさらと



握<sup>にぎ</sup>れば指のあひだより落つ

しつとりと

なみだを吸<sup>す</sup>へる砂の玉

なみだは重きものにしあるかな

大<sup>だい</sup>という字を百あまり

砂に書き

死ぬことをやめて歸<sup>きた</sup>り来れり

目さまして猶<sup>なほ</sup>起<sup>お</sup>き出<sup>い</sup>でぬ児の癖<sup>くせ</sup>は

かなしき癖ぞ

母よ咎むとがな

ひと塊くれの土よだれに涎し

泣く母の肖顔にがほつくりぬ

かなしくもあるか

燈影ほかげなき室しつに我あり

父と母

壁かべのなかより杖つゑつきて出いづ

たはむれに母を背負ひて  
そのあまり軽きに泣きて  
三步あゆまず

飄然と家を出でては

飄然と帰りし癖よ

友はわらへど

ふるさとの父の咳する度に斯く  
咳の出づるや  
病めばはかなし

わが泣くををとめら少女等きかば

病やまいぬ犬の

月に吠ほゆるに似たりといふらむ

何処いづくやらむかすかに虫のなくごとき

こころ細ぼそさを

今日けふもおぼゆる

いと暗くらき

穴あなに心を吸すはれゆくごとく思ひて

つかれて眠る

こころよく

我にはたらく仕事あれ

それを仕<sup>し</sup>遂<sup>と</sup>げて死なむと思ふ

こみ合<sup>あ</sup>へる電車の隅<sup>すみ</sup>に

ちぢこまる

ゆふべゆふべの我のいとしさ

浅<sup>あさ</sup>草<sup>くさ</sup>の夜<sup>よ</sup>のにぎはひに

まぎれ入り

まぎれ出で来しさびしき心

愛 犬の耳斬りてみぬ

あはれこれも

物に倦みたる心にかあらむ

鏡とり

能ふかぎりのさまさまの顔をしてみぬ

泣き飽きし時

なみだなみだ

不思議なるかな

それをもて洗あらへば心戯おどけたくなれり

呆あきれたる母の言葉に

気がつけば

茶ちやわん碗わんを箸はしもて敲たたきてありき

草に臥ねて

おもふことなし

わが額ぬかに糞ふんして鳥は空に遊べり

わが髭ひげの

下向くせく癖くせがいきどほろし

このごろ憎にくき男にくに似たれば

森の奥より銃じうせい声聞ゆ

あはれあはれ

みづか  
自みづから死ぬる音のよろしき

たいぼく  
大木たいぼくの幹みきに耳あて

こはん  
小半こはん日



堅<sup>かた</sup>き皮をばむしりてありき

「さばかりの事に死ぬるや」

「さばかりの事に生くるや」

止<sup>よ</sup>せ止せ問答

まれにある

この平<sup>たひら</sup>なる心には

時計の鳴るもおもしろく聴<sup>き</sup>く

ふと深き怖れを覚え

ぢつとして

やがて静かに臍ほそをまさぐる

高たかやま山のいただきに登り

なになしに帽子ぼうしをふりて

下くだり来しかな

何処どこやらに沢山たくさんの人があらそひて

鬮くしひ引くごとし

われも引きたし

怒<sup>いか</sup>る時

かならずひとつ鉢<sup>はち</sup>を割<sup>わ</sup>り

くひやくくじふく

九百九十九 割りて死なまし

いつも逢<sup>あ</sup>ふ電車の中の小男<sup>こをとこ</sup>の

稜<sup>かど</sup>ある眼<sup>まなこ</sup>

このごろ気になる

鏡<sup>かがみ</sup>屋<sup>や</sup>の前<sup>まへ</sup>に来て

ふと驚<sup>おどろ</sup>きぬ

見<sup>み</sup>すばらしげに歩<sup>あゆ</sup>むものかも

何<sup>なに</sup>となく汽車に乗りたく思ひしのみ  
汽車を下<sup>お</sup>りしに  
ゆくところなし

空家<sup>あきや</sup>に入<sup>い</sup>り  
煙草<sup>たばこ</sup>のみたることありき  
あはれただ一人居<sup>い</sup>たきばかりに

何がなしに  
さびしくなれば出<sup>で</sup>てあるく男となりて

三月みつきにもなれり

やはらかに積れる雪に  
熱ほてる頬ほを埋うづむるごとき  
恋してみたし

かなしきは  
飽あくなき利り己この一念を  
持てあましたる男にありけり

手も足も

室<sup>へや</sup>いっばいに投げ出して

やがて静かに起きかへるかな

ももとせ  
百年の長き眠りの覚めしごと

あくび  
呻してまし

思ふことなしに

うでく  
腕拱みて

このごろ思ふ

おほ  
大なる敵目<sup>てき</sup>の前に躍<sup>をど</sup>り出<sup>い</sup>でよと

手が白く

且つ大なりき

非凡なる人といはるる男に会ひしに

こころよく

人を讃めてみたくなり

利己の心に倦めるさびしさ

雨降れば

わが家の人も誰も沈める顔す

雨霽れよかし

高きより飛びおりるごととき心もて

この一生を

終るすべなきか

この日頃

ひそかに胸にやどりたる悔くあり

われを笑はしめざり

へつらひを聞けば

腹はらだ立つわがこころ



あまりに我を知るがかなしき

知らぬ家いへたたき起して

遁にげ来るがおもしろかりし

昔の恋しき

非凡ひほんなる人のごとくにふるまへる

後のちのさびしきは

何なににかたぐへむ

大おほいなる彼の身体からだが

憎<sup>にく</sup>かりき

その前にゆきて物を言ふ時

実務には役に立たざるうた<sup>びと</sup>人と

我を見る人に

金借りにけり

遠くより笛の音<sup>ね</sup>きこゆ

うなだれてある故<sup>ゆゑ</sup>やらむ

なみだ流るる

それもよしこれもよしとてある人の

その気がるさを

欲ほしくなりたり

死ぬことを

持ちやく薬をのむがごとくにも我はおもへり

心いためば

路みち傍ばたに犬ながながとあくび呻しぬ

われも真ま似ねしぬ

うらやましさに

真劍になりて竹もて犬を撃つ

せうに  
小児の顔を

よしと思へり

ダイナモの

重き唸りのここちよさよ

あはれこのごとく物を言はまし

へうきん  
剽軽の性なりし友の死顔の

青き疲れが

いまも目にあり

気の変る人に仕<sup>つか</sup>へて

つくづくと

わが世がいやになり<sup>に</sup>けるかな

龍<sup>りょう</sup>のごとくむなしき空<sup>をど</sup>に躍<sup>い</sup>り出<sup>い</sup>でて

消えゆく煙

見れば飽<sup>あ</sup>かなく

こころよき疲れなるかな

息もつかず

仕事をしたる後ののちこの疲れ

空そらねいり寝入生なまあくび 呻など

なぜするや

思ふこと人にさとらせぬため

箸はしと止めてふつと思ひぬ

やうやくに

世のならばしに慣れにけるかな

朝はやく

婚期こんきを過ぎし妹の

恋こひぶみ文めける文ふみを読めりけり

しつとりと

水を吸すひたる海綿かいめんの

重さに似たる心地こころちおぼゆる

死ね死ねと己おのれを怒いかり

もだしたる

心の底の暗きむなしさ

けものめく顔あり口をあけたてす  
とのみ見てゐぬ

人の語るを

親と子と

はなればなれの心もて静かにむか対ふ  
気まづきや何なぞ

かの船の

かの航海の船せんかく客の一人にてありき



死にかねたるは

目の前の菓子皿くわしざらなどを

かりかりと噛かみてみたくなりぬ  
もどかしきかな

よく笑ふ若き男の

死にたらば

すこしはこの世さびしくもなれ

何がなしに

息いきぎれるまでか駆け出だしてみたくなりたり  
草くさはら原などを

あたらしき背広など着て

旅をせむ

しかく今年ことしも思ひ過ぎたる

ことさらにともしび燈火を消して

まぢまぢと思ひてゐしは

わけもなきこと

浅草の 凌雲閣りょううんかくの いただきに

腕組みし日の

長き日記にきかな

尋じんじやう常のおどけならむや

ナイフ持ち死ぬまねをする

その顔その顔

こそこその話がやがて高くなり

ピストル鳴りて

人生終る

時ありて

子供のやうにたはむれす  
恋ある人のなさぬ業わざかな

とかくして家を出いづれば

日光のあたたかさあり

息ふかく吸ふ

つかれたる牛のよだれは  
たらたらと

千万年も尽きざるごとし

路みちばた傍きりいしの切石の上に

腕く拱みて

空を見上ぐる男ありたり

何やらむ

おだや  
穩かならぬ目付めつきして

鶴つるはし嘴を打つ群を見てゐる

心より今日けふは逃げ去れり

やまひ けもの  
病ある獣のごとき

不平逃げ去れり

おほどかの心来れり

あるくにも

腹に力のたまるがごとし

ただひとり泣かまほしさに

来て寝たる

やとや やぐ  
宿屋の夜具のこころよさかな

友よきは

乞食こじきの卑いやしき厭いとふなかれ

餓うゑたる時は我も爾しかりき

新しきインクのにほひ

栓せんぬ抜けば

餓うゑたる腹はらに沁しむがかなしも

かなしきは

喉のどのかわきをこらへつつ

夜寒よさむの夜具よぎにちぢこまる時

一度でも我に頭を下げさせし  
人みな死ねと

いのりてしこと

我に似し友の二人よふたり

一人は死に

一人は牢らうを出いでて今病やむ

あまりある才いを抱いだきて

妻のため



おもひわづらふ友をかなしむ

打明けて語りて

何か損そんをせしごとく思ひて

友とわかれぬ

どんよりと

くもれる空を見てゐしに

人を殺したくなり<sub>に</sub>けるかな

ひとなみ並さいの才さいに過ぎざる

わが友の

深き不平もあはれなるかな

誰<sup>たれ</sup>が見てもとりどころなき男来て

威張<sup>みば</sup>りて帰りぬ

かなしくもあるか

はたらけど

はたらけど猶<sup>なほ</sup>わが生活<sup>くらし</sup>楽にならざり

ぢつと手を見る

何もかも行末ゆくすゑの事みゆるごとき

このかなしみは

拭ぬぐひあへずも

とある日に

酒をのみたくてならぬごとく

けふけふわれ切せちに金かねを欲ほりせり

するしやう

水 晶すいしょうの玉をよろこびもてあそぶ

わがこの心

何なにの心ぞ

事もなく

且かつこころよく肥こえてゆく

わがこのごろの物足らぬかな

大いなる水晶の玉を

ひとつ欲ほし

それにむかひて物を思はむ

うぬ惚ぼるる友に

合あひづ槌ち

うちてゐぬ

施ほどこし与こしをするごとき心に

ある朝のかなしき夢のさめぎはに

鼻いに入り来きし

味み噌そを煮にる香かよ

こつこつと空地あきちに石をきざむ音

耳みみにつき来きぬ

家いへに入るまで

何なにがなしに

頭のなかに崖ありて

日毎に土のくづるるごとし

遠方に電話の鈴の鳴るごとく

今日も耳鳴る

かなしき日かな

垢じみし袷の襟よ

かなしくも

ふるさとの胡桃焼くるにほひす

死にたくてならぬ時あり  
はばかりに人目を避<sup>さ</sup>けて  
怖<sup>こは</sup>き顔する

一隊の兵を見送りて

かなしかり

何<sup>なに</sup>ぞ彼等のうれひ無<sup>な</sup>げなる

邦<sup>くに</sup>人の顔たへがたく卑<sup>いや</sup>しげに

目にうつる日なり

家にこもらむ

この次の休日やすみに一日寝てみむと

思ひすごしぬ

みとせ  
三年このかた

或る時のわれのこころを

焼きたての

ぼん  
麴ぼんに似たりと思ひけるかな

たんたらたらたんたらたらと

あまだれ  
雨滴あまだれが



痛むあたまにひびくかなしき

ある日のこと

室の障子へやしやうじをはりかへぬ

その日はそれにて心なごみき

かうしては居をられずと思ひ

立ちにしが

戸外おもてに馬いななの嘶いななきしまで

気ぬけして廊下らうかに立ちぬ

あららかに扉<sup>ドア</sup>を推<sup>お</sup>せしに  
すぐ開<sup>あ</sup>きしかば

ぢつとして

黒はた赤のインク吸ひ

堅くかわける海綿<sup>かいめん</sup>を見る

誰<sup>たれ</sup>が見ても

われをなつかしくなるごとき

長き手紙を書きたき夕<sup>ゆふべ</sup>

うすみどり

飲めばからだ身体が水のごと透すきとほるてふ

薬はなきか

いつもにら睨むランプに飽あきて

三日みかばかり

蠟らふそく燭の火にしたしめるかな

人間のつかはぬ言葉

ひよつとして

われのみ知れるごとく思ふ日

あたらしき心もとめて

名も知らぬ

街など今日けふもさまよひて来きぬ

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ

花を買きひ来て

妻つまとしたしむ

何なにすれば

此ここ処こに我ありや

時にかく打<sup>うち</sup>驚<sup>おどろ</sup>きて室<sup>へや</sup>を眺むる

人ありて電車のなかに唾<sup>つば</sup>を吐<sup>は</sup>く

それにも

心いたまむとしき

夜明けまであそびてくらす場所<sup>ほ</sup>が欲<sup>ほ</sup>し

家<sup>いへ</sup>をおもへば

こころ冷<sup>つめ</sup>たし

人みなが家<sup>いへ</sup>を持つてふかなしみよ

墓に入いるごとく

かへりて眠る

何かひとつ不思議を示し  
人みなのおどろくひまに  
消えむと思ふ

人といふ人のこころに  
一人づつ囚しうじん人がゐて  
うめくかなしき

叱<sup>しか</sup>られて

わつと泣き出す<sup>だ</sup>子供心

その心にもなりてみたきかな

盗むてふことさへ悪<sup>あ</sup>しと思ひえぬ

心はかなし

かくれ家<sup>が</sup>もなし

放<sup>はな</sup>たれし女のごときかなしみを

よわき男の

感<sup>かん</sup>ずる日なり

庭石にはいしに

はたと時計をなげうてる

昔のわれの怒りいかいとしも

顔あかめ怒りいかしことが

あくる日は

さほどにもなきをさびしがるかな

いらだてる心よ汝なれはかなしかり

いざいざ



すこし<sup>あくび</sup> 呻<sup>あぐび</sup>などせむ

女あり

わがいひつけに背<sup>そむ</sup>かじと心を碎<sup>くだ</sup>く  
見ればかなしも

ふがひなき

わが日<sup>ひ</sup>の本<sup>もと</sup>の女<sup>をんな</sup>等を

秋<sup>あき</sup>雨<sup>さめ</sup>の夜<sup>よ</sup>にのしりしかな

男<sup>まじ</sup>とうまれ男と交り

負けてをり

かるがゆゑにや秋が身に沁しむ

わが抱いだく思想はすべて

金かねなきに因いんするごとし

秋の風吹く

くだらない小説を書きてよろこべる

男隣あはれなり

初はつあき秋の風

秋の風

今日けふよりは彼かのふやけたる男に

口を利きかじと思ふ

はても見えぬ

真直ますぐの街をあゆむごとき

こころを今日は持ちえたるかな

何事も思ふことなく

いそがしく

暮らせしひとひ一日を忘れじと思ふ

何事もかねかね金とわらひ

すこし経へて

またもには俄かに不平つくのり来

誰たそ我われに

ピストルにても撃うてよかし

伊藤のごとく死にて見せなむ

やとばかり

桂首相かつらに手とられし夢みて覚さめぬ

秋の夜の二時

煙

一

病やまひのごと

思しきやう郷のこころ湧わく日なり

目にあをぞらの煙けむりかなしも

己おのが名をほのかに呼びて

涙せし

十四じふしの春にかへる術すべなし

青空に消えゆく煙

さびしくも消えゆく煙

われにし似るか

かの旅の汽車の車しやしやう掌やうが

ゆくりなくも

我が中学の友なりしかな

ほとばしる唧筒ポンプの水の

心地こころちよさよ

しばしは若きころもて見る

師も友も知らで責せめにき

謎なぞに似る

わが学業のおこたりの因もと

教室の窓より遁にげて

ただ一人

かの城址しろあとに寝に行きしかな

こずかた  
不来方のお城の草に寝ころびて

空に吸はれし

じふご  
十五の心

かなしみといはばいふべき

あぢ  
物の味

な  
私の嘗めしはあまりに早かり

あふ  
晴れし空仰げばいつも

口笛を吹きたくなりて



吹きてあそびき

夜寝ても口笛吹きぬ

口笛は

十五の我の歌にしありけり

よく叱しかる師ありき

髯ひげの似たるより山羊やぎと名づけて

口真似もしき

われと共ともに

小鳥に石を投げて遊ぶ

後備大尉の子もありしかな

城址しろあとの

石に腰掛こしかけ

禁制の木の実こみをひとり味あぢはひしこと

その後のちに我を捨てし友も

あの頃は共に書ふみよ読み

ともに遊びびき

学校の図書庫としよぐらの裏の秋の草  
黄きなる花咲きし  
今も名知らず

花散れば

先まづ人さきに白ふくきの服いへい着て家出いへいづる  
我にてありしか

今は亡き姉の恋人のおとうとと  
なかよくせしを  
かなしと思ふ

夏休み果はててそのまま  
かへり来こぬ

若き英語の教師もありき

ストライキ思いひ出いでても  
今は早はや吾わがが血をど躍どらず  
ひそかに淋さびし

もりをか  
盛岡もりおかの中学校の  
バルコン  
露台バルコンの

欄干てすりに最も一度我を倚よらしめ

神有りと言ひ張る友を

説ときふせし

かの路みち傍ばたの栗くりの樹きの下もと

西風に

うちまるおほぢ

内丸大路の桜の葉

かさこそ散るを踏ふみてあそびき

そのかみの愛読しよの書よ

おほかた  
大方は

今は流行はやらずなりにけるかな

石ひとつ

坂をくだるがごとくにも

我けふの日に到り着きたる

愁うれひある少せうねん年の眼うらやに羨みき

小鳥の飛ぶを

飛びてうたふを

解剖ふわけせし

蚯蚓みみずのいのちもかなしかり

かの校庭もくさくの木柵もとの下

かぎりなき知識よくの慾よくに燃ゆる眼を

姉いたは傷いたみき

人恋ふるかと

蘇峯そほうの書しよを我すに薦すめし友早く

校かうを退しりぞきぬ

まづしさのため

おどけたる手つきをかしと

我のみはいつも笑ひき

博学の師を

自<sup>し</sup>が才<sup>さい</sup>に身をあやまちし人のこと

かたりきかせし

師もありしかな

そのかみの学校一のなまけ者

今は真<sup>ま</sup>面<sup>め</sup>目に



はたらきて居りを

あなか田舎めく旅の姿を

みか三日ばかり都に曝しさら

かへる友かな

ぼらしま茨島の松の並木の街道を

われと行きし少女をとめ

才さいをたのみき

眼を病みて黒き眼鏡めがねをかけし頃

その頃よ

一人泣くをおぼえし

わがこころ

けふもひそかに泣かむとす

友みな己<sup>おの</sup>が道をあゆめり

先<sup>さき</sup>んじて恋のあまさと

かなしさを知りし我なり

先<sup>お</sup>んじて老ゆ

興きよきた来れば

友なみだ垂たれ手を揮ふりて

醉ゑひどれ漢のごとくなりて語りき

人ごみの中をわけ来くる

わが友の

むかしながらの太ふとき杖つゑかな

見よげなる年賀の文ふみを書く人と

おもひ過ぎぎにき

三みとせ年ばかりは

夢さめてふつと悲しむ

わが眠り

昔のごとく安からぬかな

そのむかし秀才しうさいの名の高かりし

友牢ちゆうにあり

秋のかぜ吹く

近眼ちかめにて

おどけし歌をよみ出いでし

茂雄しげをの恋もかなしかりしか

わが妻のむかしの願ひ

音楽のことにかかりき

今はうたはず

友はみな或日あるひはう四方に散り行きぬ

その後八年のちやとせ

名な挙げしもなし

わが恋を

はじめて友にうち明けし夜よるのことなど

思いひ出いづる日

糸切れし紙たこ鳶のごとくに

若き日の心かろくも

とびさりしかな

二

ふるさとの訛なまりなつかし

停車場ていしやばの人ごみの中に

そを聴ききにゆく

やまひある獣けもののごとき

わがこころ

ふるさとのこと聞けばおとなし

ふと思ふ

ふるさとにゐて日毎聴ひごとききし雀すずめの鳴くを  
三年聴みとせかざり

亡なくなれる師がその昔

たまひたる

地理の本など取りいでて見る

その昔

小学校の<sup>まさやね</sup>桎屋根に我が投げし<sup>まり</sup>鞠

いかにかなりけむ

ふるさとの

かの路<sup>みちばた</sup>傍のすて石よ

今年も草に埋<sup>うづ</sup>もれしらむ



わかれをればいと妹いとしも

赤き緒をの

下駄げたなど欲ほしとわめく子なりし

ふつか  
二日前に山の絵見ゑしが

けさ  
今朝けさになりて

にはかに恋しふるさとの山

あめうり  
飴あめ売うりのチャルメラ聴きけば

うしなひし

をさなき心ひろへるごとし

このごろは

母も時ときどき時ときどきふるさとのことを言ひ出いづ

秋に入いれるなり

それとなく

郷里くにのことなど語り出いでて

秋の夜よに焼く餅もちのほひかな

かにかくに澁民村しぶたみむらは恋しかり

おもひでの山

おもひでの川

田も畑はたも売りて酒のみ

ほろびゆくふるさと人びとに

心寄する日

あはれかの我の教へし

子等こらもまた

やがてふるさとを棄すてて出いづるらむ

ふるさとを出いで来きし子等の

相あい会あひて

よろこぶにまさるかなしみはなし

石をもて追はるるごとく

ふるさとを出いでしかなしみ

消ゆる時なし

やはらかに柳あをめる

北きた上かみの岸きし辺べ目に見ゆ

泣けとごとくに

ふるさとの

村医そんいの妻のつつましき櫛卷くしまきなども

なつかしきかな

かの村の登記所とうきしよに来て

肺病はいやみて

間もなく死にし男もありき

小学の首席を我と争あらそひし

友のいとなむ

木賃宿きちんやどかな

千代治等も長じて恋し

子を挙げぬ

わが旅にしてなせしごとくに

ある年の盆の祭に

衣貸さむ踊れと言ひし

女を思ふ

うすのろの兄と

不具の父もてる三太はかなし

よる ふみよ  
夜も書読む

我と共に

くりげ こうま  
栗毛の仔馬走らせし

ぬすみぐせ  
母の無き子の盗癖かな

おほがた ひふ  
大形の被布の模様  
の赤き花

今も目に見ゆ

むつ  
六歳の日の恋

その名さへ忘れし頃

飄然へうぜんとふるさとに来て

咳せきせし男

意地悪いちわるの大工だいくの子などもかなしかり

戦いくさに出いでしが

生きてかへらず

肺を病む

極道地主ごくだうぢぬしの総領そうりやうの

よめとりの日の春の雷らいかな



宗次郎そうじろに

おかねが泣きて口説くどき居をり

大根だいこんの花白しろきゆゆぐれ

小せうしん心の役場の書記の

気の狂ふれし樽うはさに立てる

ふるさとの秋

わが従いとこ兄

野山の獵かりに飽あきし後のち

酒のみ家いへ売り病やみて死しにしかな

我ゆきて手をとれば

泣きてしづまりき

酔ゑひて荒あばれしそのかみの友

酒のめば

刀かたなをぬきて妻を逐おふ教師けうしもありき

村を逐おはれき

年ごとに肺はいびやう病やうやみの殖ふえてゆく

村に迎へし

若き医者かな

ほたる狩<sup>がり</sup>

川にゆかむといふ我を

山路<sup>やまち</sup>にさそふ人にてありき

馬鈴薯<sup>ばれいしょ</sup>のうす紫の花に降<sup>ふ</sup>る

雨を思へり

都<sup>みやこ</sup>の雨に

あはれ我がノスタルジヤは

金きんのごと

心に照れり清くしみらに

友として遊ぶものなき

性しやう悪わるの巡査こらの子等も

あはれなりけり

閑古鳥かんこどり

鳴く日となれば起おこるてふ

友のやまひのいかになりけむ

わが思ふこと

おほかたは正ただしかり

ふるさとのたより着つける朝あしたは

今日聞けば

かの幸さちうすきやもめ人びと

きたなき恋に身いを入るるてふ

わがために

なやめる魂たまをしづめよと

讚美歌うたふ人ありしかな

あはれかの男のごときたましひよ

今は何処いづこに

何を思ふや

わが庭の白き躑躅つづじを

うすづき薄月の夜よに

を折りゆきしことな忘れそ

わが村に

初めてイエス・クリストの道を説ときたる

若き女かな

霧ふかき好摩かうまの原はらの

停車場の

朝の虫こそすずろなりけれ

汽車の窓

はるかに北にふるさとの山見え来くれば  
襟えりを正ただすも

ふるさとの土をわが踏めば

何がなしに足かろ軽くなり

心おも重れり

ふるさとに入りて先まづ心いた傷むかな

道広くなり

橋もあたらし

見もしらぬ女をんなけうし教師が

そのかみの

わが学まなびや舎の窓に立てるかな



かの家いへのかの窓まどにこそ

春はるの夜よを

秀子ひでことともに蛙かはづ聴きけれ

そのかみの神童しんどうの名なの

かなしさよ

ふるさとに来て泣なくはそのこと

ふるさとの停てい車しや場ば路みちの

川かわばたの

胡桃くるみの下したに小石ひろ拾ひろへり

ふるさとの山に向ひて

言ふことなし

ふるさとの山はありがたきかな

## 秋風のこころよさに

ふるさとの空とほ遠みかも

たか高き屋やにひとりのぼりて

うれ愁ひくだて下る

皎<sup>かう</sup>として玉をあぎむく小人<sup>せうじん</sup>も  
秋来<sup>あきく</sup>といふに

物を思へり

かなしきは

秋風ぞかし

稀<sup>まれ</sup>にのみ湧<sup>わ</sup>きし涙の繁<sup>しじ</sup>に流るる

青に透<sup>す</sup>く

かなしみの玉に枕<sup>まくら</sup>して

松のひびきを夜もすがら聴<sup>き</sup>く

神寂さびびし七なな山やまの杉  
火のごとく染めて日入いりぬ  
静かなるかな

そを読めば  
愁うれひ知るといふ書ふ焚みたける  
いにしへ人びとの心よろしも

ものなべてうらははかなげに  
暮れゆきぬ

とりあつめたる悲しみの日は

みづたまり  
水 潦

暮れゆく空とくれなるの紐ひもを浮べぬ  
あきさめ  
秋雨の後

秋立つは水にかも似る

あら  
洗はれて

思ひことごと新しくなる

うれ  
愁ひ来て

丘にのぼれば

名も知らぬ鳥啄めり赤き茨の実

秋の辻

四すぢの路の三すぢへと吹きゆく風の

あと見えすかも

秋の声まづいち早く耳に入る

かかる性持つ

かなしむべかり

目になれし山にはあれど

秋来くれば

神や住まむとかしこみて見る

わが為なさむこと世に尽つきて

長き日を

かくしもあはれ物を思ふか

さらさらと雨落ち来きたり

庭の面もの濡ぬれゆくを見て

涙わすれぬ

ふるさとの寺の御廊みらうに

踏ふみにける

小櫛をぐしの蝶てふを夢にみしかな

こころみに

いとけなき日の我となり

物言ひてみむ人あれと思ふ

はたはたと黍きびの葉鳴れる

ふるさとの軒端のきばなつかし



秋風吹けば

す  
摩れあへる肩のひまより

はつかにも見きといふさへ

にき  
日記に残れり

みやびを  
風流男は今も昔も

あわゆき  
泡雪の

たまで  
玉手さし捲く夜にし老ゆらし

かりそめに忘れても見まし

石だたみ

春生おふる草うもに埋うもるるがごと

その昔ゆりかご揺籃かごに寝て

あまたたび夢にみし人か

切せちになつかし

かみなづき  
神無月

岩手いはての山の

初雪まゆの眉まゆにせまりし朝を思ひぬ

ひでり雨さらさら落ちて

せんざい  
前栽の

はぎ  
萩のすこしくみだ乱れたるかな

秋の空廓くわくれう 寥として影もなし

あまりにさびし

からす  
烏など飛べ

うご  
雨後の月

ほどよく濡れしやねがはら屋根瓦の

そのところどころ光るかなしさ

われ饑<sup>う</sup>ゑてある日に

細き尾を掉<sup>ふ</sup>りて

饑<sup>う</sup>ゑて我を見る犬の面<sup>つら</sup>よし

いつしかに

泣くといふこと忘れたる

我泣かしむる人のあらじか

汪<sup>わう</sup>然<sup>ぜん</sup>として

ああ酒のかなしみぞ我<sup>きた</sup>に來れる

立ちて舞ひなむま

いとどな  
鳴く

そのかたはらの石に踞しきよ

泣き笑ひしてひとり物言ふ

力なく病みし頃よりや  
ころ

口すこし開きて眠るがあ  
ねむ

癖くせとなりにき

人ひとり得るに過ぎざる事をもてう

たいぐわん  
大願とせし

若きあやまち

物怨ゑずる

そのやはらかき上目うはめをば

愛めづとことさらつれなくせむや

かくばかり熱あつき涙は

初恋の日にもありきと

泣く日またなし

長く長く忘れし友に

会ふごとき

よろこびをもて水の音聴きく

秋の夜の

鋼鉄はがねの色の大空に

火を噴はく山もあれなど思ふ

岩手山いはてやま

秋はふもとの三さん方ぱうの

野に満つる虫を何なにと聴くらむ

父のごと秋はいかめし

母のごと秋はなつかし

家持いへたぬこ児に

秋来くれば

恋こふる心のいとまなさよ

夜よもい寝ねがてに雁かり多く聴く

長なが月つきも半なかばになりぬ

いつまでか



かくも幼く打出うちいでずあらむ

思ふてふこと言はぬ人の

おくり来きし

忘れな草ぐさもいちじろかりし

秋の雨に逆反さかぞりやすき弓ゆみのごと

このごろ

君のしたしまぬかな

松の風夜昼よひるひびきぬ

人訪とはぬ山の祠ほこらの

石馬いしうまの耳みみに

ほのかなる朽木くちきの香かり

そがなかの蕈たけの香かりに

秋やや深し

時雨しぐれ降るごとき音ねして

木伝こづたひぬ

人によく似にし森もりの猿さるども

森の奥

遠きひびきす

木のうろにうす白ひくしゅじゅ侏儒の国にかも来きし

世のはじめ

まづ森ありて

はんしん半神の人そが中に火や守りけむ

はてもなく砂うちつづく

ゴビ戈壁の野に住みたまふ神は

秋の神かも

あめつちに

わが悲しみと月げつくわう光と

あまねき秋の夜よとなれりけり

うらがなしき

夜の物よるの音ねも洩れ来くるを

拾ひろふがごとくさまよひ行ゆきぬ

旅の子の

ふるさときにき来て眠るがに

げに静かにも冬の来きしかな

# 忘れがたき人人

一

潮しほかをる北はまべの浜辺はまべの

砂山はまなすのかの浜はまなす薔薇はまなすよ

今年も咲けるや

たのみつる年の若かぞさを数かぞへみて

指を見つめて

旅がいやになりき

みたび  
三度ほど

汽車の窓よりながめたる町の名なども

したしかりけり

はこだて  
函館の床屋とこやの弟子でしを

おもひ出いでぬ

耳そ剃らせるがこころよかりし

わがあとを追ひ来<sup>き</sup>て

知れる人もなき

へんど  
辺土に住みし母と妻かな

船に酔<sup>ゑ</sup>ひてやさしくなれる

いもうとの眼<sup>め</sup>見ゆ

つがる  
津軽の海を思へば

目を閉<sup>と</sup>ぢて

しやうしん  
傷 心の句を誦<sup>ず</sup>してゐし

友の手紙のおどけ悲しも

をさなき時

橋の欄干らんかんに糞塗くそぬりし

話も友はかなしみてしき

おそらくは生しやうがい涯妻をむかへじと

わらひし友よ

今もめとらず

あはれかの

眼鏡めがねの縁ふちをさびしげに光らせてゐし



女教師よ

友われに飯めしを与へき

その友に背そむきし我の

性さがのかなしさ

函館はこだての青柳町あをやぎちやう  
こそかなしけれ

友の恋こひうた歌

矢ぐるまの花

ふるさとの

麦のかをりを懐かしむ

女まゆの眉にこころひかれき

あたらしき洋書の紙の

香かをかぎて

一途いちづに金かねを欲ほしと思ひしが

しらなみの寄せて騒さわげる

函館おほもりはまの大森浜に

思ひしことども

朝な朝な

支那しなの俗歌ぞくかをうたひ出いづる

まくら時計を愛めでしかなしみ

漂へうはく泊うれの愁しよひを叙じよして成ならざりし

草稿さうかうの字の

読みがたさかな

いくたびか死なむとしては

死なざりし

わが来こしかたのをかしく悲し

函館の臥牛ぐわぎうの山やまの半腹はんぷくの

碑ひの漢詩からうたも

なかば忘れぬ

むやむやと

口くちの中うちにてたふとげの事つぶやを呟やく

乞食こじきもありき

とるに足らぬ男と思へと言ふごとく  
山いに入りいにき

神のごとき友

まきたばこ  
巻煙草口にくはへて

なみ  
浪あらき

いそ  
磯の夜霧に立ちし女よ

演習のひまにわざわざ

汽車に乗りて

と  
訪ひ来し友とのめる酒かな

おほかは  
大川の水の面を見るごとに

郁雨いくうよ

君のなやみを思ふ

智慧ちゑとその深き慈悲じひとを

もちあぐみ

為なすこともなく友は遊べり

こころざし得えぬ人人の

あつまりて酒のむ場所が

我が家なりしかな

かなしめば高く笑ひき

酒をもて

悶もんを解げすといふ年上の友

若くして

数人すにんの父となりし友

子なきがごとく酔よへばうたひき

さりげなき高き笑ひが

酒とともに

我はらわたが腸わたに沁しみみにけらしな

あくびか  
呻嚙み

夜汽車の窓に別れたる

別れが今は物足らぬかな  
ものた

雨に濡れし夜汽車の窓に

映りたる  
うつ

山間の町のともしびの色  
やまあひ

雨つよく降る夜の汽車の

たえまなく雫流るる  
しづく



まどガラス  
窓硝子かな

真夜中の

くちあんえき

俱知安駅おに下りゆきし

女の鬢びんの古き痕きずあと

さつぽろ  
札幌に

かの秋われの持てゆきし

しかして今も持てるかなしみ

アカシヤの街なみき越なみきにポプラに

秋の風

吹くがかなしと日記にきに残れり

しんとして幅広まちき街の

秋の夜の

玉蜀黍たうもろこしの焼くるにほひよ

わが宿の姉いもとと妹のいさかひに

初夜しよや過ぎゆきし

札幌の雨

いしかり  
石狩の**びくに**美国といへる停車場の

さくほ  
柵に乾してありし

赤き布片きれかな

かなしきは小樽をたるの町よ

歌ふことなき人人の

声の荒さよ

泣くがごと首ふるはせて

手の相さうを見せよといひし

えきしや  
易者えきしやもありき

いささかのぜにか銭借りてゆきし

わが友の

うしろすがた後姿のかた肩の雪かな

世わたりのつたな拙きことを

ひそかにも

ほこ誇りとしたる我にやはあらぬ

な汝がや痩せしからだはすべて

むほんぎ謀叛気のかたまりなりと

いはれてしこと

かの年のかの新聞の

初雪の記事を書きしは

我なりしかな

椅子いすをもて我を撃うたむと身みがま構へし

かの友の酔よひも

今は醒さめつらむ

負けたるも我にてありき

あらしひの因もとも我なりしと

今は思へり

殴なぐらむといふに

殴れとつめよせし

昔の我のいとほしきかな

汝なれみたび三度

この咽喉のどに劍けんを擬ぎしたりと  
彼告かれこくべつ別の辞じに言へりけり

あらずひて

いたく憎<sup>にく</sup>みて別れたる

友をなつかしく思ふ日も来<sup>き</sup>ぬ

あはれかの眉<sup>まゆ</sup>の秀<sup>ひい</sup>でし少年よ

弟と呼べば

はつかに笑<sup>ゑ</sup>みしが

わが妻に着物縫<sup>ぬ</sup>はせし友ありし

冬早く来<sup>く</sup>る

植民地かな

平手<sup>ひらて</sup>もて

吹雪<sup>ふぶき</sup>にぬれし顔を拭<sup>ふ</sup>く

友共産を主義とせりけり

酒のめば鬼<sup>おに</sup>のごとくに青かりし

大いなる顔よ

かなしき顔よ

樺<sup>からふと</sup>太<sup>い</sup>に入りて

新しき宗教を創<sup>はじ</sup>めむといふ



友なりしかな

をさ<sup>をさ</sup>  
治まれる世の事無さに<sup>ことな</sup>

飽きたりといひし頃こそ<sup>あ</sup>

かなしかりけれ

共同の薬屋開き

まう<sup>まう</sup>  
儲けむといふ友なりき

さぎ<sup>さぎ</sup>  
詐欺せしといふ

あをじろき<sup>ほほ</sup>頬に涙を光らせて

死をば語りき

若き商人あきびと

子をお負ひて

雪の吹き入る停車場に

われ見送りし妻の眉まゆかな

敵として憎みし友と

やや長く手をにぎば握りき

わかれといふに

ゆるぎ出<sup>い</sup>づる汽車の窓より

人先<sup>ひとさき</sup>に顔を引きしも

負<sup>ま</sup>けざらむため

みぞれ降る

石狩<sup>いしかり</sup>の野の汽車に読みし

ツルゲエネフの物語かな

わが去れる後<sup>のちうはさ</sup>の噂を

おもひやる旅出<sup>たびで</sup>はかなし

死ににゆくごと

わかれ来てふと瞬またたけば

ゆくりなく

つめたきものの頬をつたへり

忘れ来し煙草たばこを思ふ

ゆけどゆけど

山なほ遠き雪の野の汽車

うす紅あかく雪に流れて

いりひかげ  
入日影

あらの  
曠野の汽車の窓を照せり

腹すこし痛み出でしを

しのびつつ

ちやうろ  
長路の汽車にのむ煙草かな

のりあひ  
乗合の砲兵士官の

さや  
劍の鞘

がちやりと鳴るに思ひやぶれき

名のみ知りて縁もゆかりもなき土地の

宿屋やどや安けし

我が家いへのごと

伴つれなりしかの代議士の

口あける青き寐顔ねがほを

かなしと思ひき

今夜こそ思ふ存ぞんぶん分泣いてみむと

泊とまりし宿屋の

茶のぬるさかな

水蒸気

列車の窓に花のごと凍てしを染むる

あかつきの色

ごおと鳴る風のあと

乾きたる雪舞ひ立ちて

林を包めり

空知川雪に埋れて

鳥も見えず

岸辺の林に人ひとりゐき

寂<sup>せき</sup>莫<sup>ぼく</sup>を敵とし友とし

雪のなかに

長き一生を送る人もあり

いたく汽車に疲れて猶<sup>なほ</sup>も

きれぎれに思ふは

我のいとしさなりき

うたふごと駅の名呼びし

柔<sup>にうわ</sup>和なる



若き駅夫えきごの眼をも忘れず

雪のなか

処しよしよ処しよしよに屋根見えて

煙えんとつ突けむりの煙うすくも空にまよへり

遠くより

笛ふえながながとひびかせて

汽車今とある森林いに入る

何事も思ふことなく

ひいちにち  
日一日

汽車のひびきに心まかせぬ

さいはての駅に下り立ちお

雪あかり

さびしき町にあゆみ入いりにき

しらしらと氷かがやき

千鳥なく

くしろ  
釧路の海の冬の月かな

こほりたるインクの鑊びんを

火に翳かざし

涙ながれぬともしびの下もと

顔とこゑ

それのみ昔に変わらざる友にも会ひき

国の果はてにて

あはれかの国のはてにて

酒のみき

かなしみの滓をりを啜すするごとくに

酒のめば悲しみ一時に湧わき来くるを  
寝ねて夢みぬを

うれしとはせし

出だしぬけの女の笑ひ

身に沁しみき

厨くりやに酒の凍こほる真夜中

わが酔よひに心いためて

うたはざる女ありしが

いかになれるや

小こやつこ奴といひし女の

やはらかき

耳みみたほ朶なども忘れがたかり

よりそひて

深夜しんやの雪の中に立つ

女の右手めてのあたたかさかな

死にたくはないかと言へば

これ見よと

咽喉のんどの痕きずを見せし女かな

芸げいごと事も顔も

かれより優すぐれたる

女あしぎまに我を言へりとか

舞まへといへば立ちて舞ひにき

おのづから

悪あくしゆ酒ゑの酔よひにたふるるまでも

死ぬばかり我が酔ふをまちて

いろいろの

かなしきことを囁きし人

いかにせしと言へば

あをじろき酔ひぎめの

おもてし  
面に強ひて笑みをつくりき

かなしきは

かの白玉のごとくなる腕に残せし

キスの痕かな

酔<sup>よ</sup>ひてわがうつむく時も  
水ほしと眼<sup>め</sup>ひらく時も

呼びし名なりけり

火をしたふ虫のごとくに

ともしびの明るき家<sup>いへ</sup>に

かよひ慣<sup>な</sup>れにき

きしきしと寒さに踏<sup>い</sup>めば板<sup>い</sup>軋<sup>き</sup>む

かへりの廊下の



不意のくちづけ

その膝ひざまくらに枕しつつも

我がこころ

思ひしはみな我のことなり

さらさらと氷の屑くづが

波に鳴る

磯の月夜のゆきかへりかな

死にしとかこのごろ聞きぬ

恋がたき

才さいあまりある男なりしが

ととせ  
十年まへに作りしといふ漢からうた詩を

酔ゑへば唱となへき

旅に老おいし友

吸ふごとに

鼻こほがびたりと凍りつく

寒き空気を吸ひたくなりぬ

波もなき二月の湾わんに

白塗しろぬりの

外国船が低く浮かべり

三味線さみせんの絃いとのきれしを

火事のごと騒ぐ子ありき

大雪の夜よに

神のごと

遠く姿をあらはせる

阿寒あかんの山の雪のあけぼの

郷里くににゐて

身投げせしことありといふ  
女の三味さみにうたへるゆふべ

えびいろ  
葡萄色の

古き手帳てちやうにのこりたる

かの会あひびき合あひびきの時ときと処ところかな

よごれたる足袋たびは穿く時の  
気味きみわるき思おもひに似たる

おもひで  
思出もあり

わが室へやに女泣きしを

小説のなかの事かと

おもひ出いづる日

らうたうさ  
浪淘沙

ながくも声をふるはせて

うたふがごとき旅なりしかな

いつなりけむ

夢にふと聴ききてうれしかりし

その声もあはれ長く聴かざり

頬ほの寒さき

流離りゅうりの旅の人として

路問みちとふほどのこと言ひしのみ

さりげなく言ひし言葉は

さりげなく君も聴きつらむ

それだけのこと

ひややかに清き大理石なめいしに

春の日の静かに照るは

かかる思ひならむ

世の中の明るさのみを吸ふごとき

黒き瞳ひとみの

今も目にあり

かの時に言ひそびれたる

大切な言葉は今も

胸にのこれど

真ましろ白なるラムプのかさ笠の

瑕きずのごと

流離の記憶消しがたきかな

函はこ館だてのかの焼やけ跡あとを去りし夜よの

こころ残りを

今も残しつ



人がいふ

鬢びんのほつれのめでたさを

物書く時の君に見たりし

馬鈴薯ばれいしよの花咲く頃と

なれりけり

君もこの花を好きたまふらむ

山の子の

山を思ふがごとくにも

かなしき時は君を思へり

忘れをれば

ひよつとした事が思ひ出の種たねにまたなる

忘れかねつも

病やむと聞き

癒いえしと聞きて

四しひやくり百里のこなたに我はうつつなかりし

君に似し姿を街まちに見る時の

こころ躍をどりを

あはれと思へ

かの声を最<sup>もいちど</sup>一度聴かば

すつきりと

胸や霽<sup>は</sup>れむと今朝<sup>けさ</sup>も思へる

いそがしき生活<sup>くらし</sup>のなかの

時<sup>とき</sup>折<sup>おり</sup>のこの物おもひ

誰<sup>たれ</sup>のためぞも

しみじみと

物うち語る友もあれ

君のことなど語り出いでなむ

死ぬまでに一度会はむと

言ひやらば

君もかすかにうなづくらむか

時として

君を思へば

安かりし心にはかに騒ぐかなしき

わかれ来て年としを重ねて  
年としごとに恋しくなれる

君にしあるかな

石狩いしかり みやこの都みやこの外の

君が家

林檎りんごの花の散りてやあらむ

長ふみき文

三年みとせのうちみたびきに三度来ぬ

我の書きしは四度よたびにかあらむ

## 手套を脱ぐ時

てぶくろ  
手套を脱ぐ手ふと休む

何やらむ

こころかすめし思ひ出のあり

いつしかに

じやう  
情をいつはること知りぬ

ひげ  
髭を立てしもその頃なりけむ

朝の湯の

湯槽ゆぶねのふちにうなじ載のせ

ゆるく息いきする物思ひかな

夏来くれば

うがひ薬の

病やまひある齒はに沁しむ朝のうれしかりけり

つくづくと手をながめつつ

おもひ出いでぬ

キスが上じやうず手の女なりしが

さびしきは

色にしたしまぬ目のゆゑと

赤き花など買はせけるかな

新しき本を買ひ来て読む夜半よはの

そのたのしさも

長くわすれぬ

たびなのか  
旅七日

かへり来きぬれば



わが窓の赤きインクの染みもなつかし

こもんじよ  
古文書のなかに見いでし

よごれたる

すひとりがみ  
吸取紙をなつかしむかな

手にためし雪の融くるが

ここちよく

わが寐飽きたる心には沁む

薄れゆく障子の日影

そを見つつ

こころいつしか暗くなりゆく

ひやひやと

夜は薬の香かのほふ

医者が住みたるあとの家いへかな

まどガラス  
窓硝子

塵ちりと雨くもとに曇りたる窓硝子にも

かなしみはあり

むとせ  
六年ほど日毎日毎にかぶりたる

古き帽子も

棄<sup>す</sup>てられぬかな

こころよく

春のねむりをむさぼれる

目にやはらかき庭の草かな

あかれんぐわ  
赤煉瓦遠くつづける高塀<sup>たかべい</sup>の

むらさきに見えて

春の日ながし

春の雪

銀座の裏の三階の煉瓦造づくりに

やはらかに降る

よごれたる煉瓦の壁に

降りて融とけ降りては融とくる

春の雪かな

目を病やめる

若き女の倚よりかかる

窓にしめやかに春の雨降る

あたらしき木のかをりなど

ただよへる

新開町しんかいまちの春の静けさ

春の街まち

見よげに書ける女名をんななの

門かど札ふだなどを読みありくかな

そことなく

蜜柑みかんの皮の焼くるごときにはひ残りて  
夕ゆふべとなりぬ

にぎはしき若き女の集あつまり会の

こゑ聴きき倦うみて

さびしくなりたり

何処どこやらに

若き女の死ぬごとき悩なやましきあり

春みぞれの霰降る

コニヤツクの酔よひのあととなる

やはらかき

このかなしみのすずろなるかな

白しろき皿さら

拭ふきては棚たなに重かさねるる

酒場の隅すみのかなしき女

乾かわきたる冬ふゆの大路おほぢの

何いづく処ところやらむ

石炭酸せきたんさんのせにほひひそめり

赤あかあかと入日いりひうつれる

河ばたの酒場の窓の

白き顔かな

新あらたしきサラダの皿さらの

酢すのかをり

こころに沁しみみてかなしき夕ゆふべ

空そらいろ色の罎びんより

山羊やぎの乳をつぐ



手のふるひなどいとしかりけり

すがた見の

息いきのくもりに消されたる

酔よひうるみの眸まみのかなしき

ひとしきり静かになれる

ゆふぐれの

厨くりやにのこるハムのにほひかな

ひややかにびん罎びんのならべるたな棚たなの前

齒<sup>は</sup>せせる女を

かなしとも見き

やや長きキスを交<sup>かは</sup>して別<sup>き</sup>れ来し

深夜の街の

遠き火事かな

病院の窓のゆふべの

ほの白<sup>しろ</sup>き顔にありたる

あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>み<sup>み</sup>お<sup>お</sup>ぼ<sup>ぼ</sup>  
淡<sup>あ</sup>き見<sup>み</sup>覚<sup>お</sup>え

何時いつなりしか  
かの大川おほかはの遊船いうせんに  
舞まひし女をおもひ出でにけり

用もなき文ふみなど長く書きさして

ふと人こひし

街でに出てゆく

しめらへる煙草たばこを吸へば

おほよその

わが思ふことも軽かろくしめれり

するどくも

夏の来るきたを感じつつ

雨後うごの小庭こにはの土の香かを嗅かぐ

すずしげに飾かざり立てたる

硝子屋ガラスやの前にながめし

夏の夜の月

君来るといふに夙とく起き

白シャツの

袖そでのよごれを氣にする日かな

おちつかぬ我が弟の

このごろの

眼のうるみなどかなしかりけり

どこやらに杭くひ打つ音し

おほをけ  
大桶をころがす音し

雪ふりいでぬ

ひとけ  
人気なき夜よの事務室に

けたたましく

電話の鈴りんの鳴りて止みたり

目さまして

ややありて耳いに入り来きたる

真夜中すぎの話しかな

見てをれば時計とまれり

吸はるるごと

心はまたもさびしさささに行くゆ

あさあさ  
朝朝の

うがひの料しろの水すゐ葉やくの

びん  
罎びんがつめたき秋となりにけり

なだら  
夷なだらかに麦の青める

丘の根の

こみち  
小径こみちに赤き小櫛をぐしひろへり

すぎふ  
裏山すぎふの杉生のなかに

まだら  
斑まだらなる日影ひかげ這はひ入いる

秋のひるすぎ

港町

とろろと鳴きて輪を描くとび鳶をあつ圧せる  
潮しほぐもりかな

こはるびくもりガラス  
小春日の曇硝子にうつりたる  
鳥とり影かげを見て

すずろに思ふ

ひとならび泳げるのきごとき  
家いへいへのたかひく高低の軒のきに



冬の日の舞ふ

京橋の滝山町の

たきやまちやう

新聞社

灯ひともる頃のいそがしさかな

よく怒いかる人にてありしわが父の

日いごろ怒いからず

怒れと思ふ

あさ風が電車のなかに吹き入れし

柳のひと葉やなぎ

手にとりて見る

ゆゑもなく海が見たくて

海に来ぬ

こころ傷いたみてたへがたき日に

たひらなる海につかれて

そむけたる

目をかきみだす赤き帯おびかな

今日逢あひし町の女の

どれもこれも

恋にやぶれて帰るごとき日

汽車の旅

とある野のなか中の停車場の

夏草の香かのなつかしかりき

朝まだき

やつと間まに合あひし初はつあき秋の旅たび出の汽車の

堅かたき麵ぱん麩なかな

かの旅の夜汽車の窓に

おもひたる

我がゆくすゑのかなしかりしかな

ふと見れば

とある林の停車場の時計とまれり

雨の夜の汽車

わかれ来て

あかりをぐら  
燈火小暗き夜の汽車の窓に弄ぶ  
もてあそ

青き林檎りんごよ

いつも来くる

この酒肆さかみせのかなしさよ

ゆふ日赤あかあか赤と酒に射さし入いる

白き蓮沼はすぬまに咲くごとく

かなしみが

酔ゑひのあひだにはつきりと浮く

壁かべごしに

若き女の泣くをきく

旅の宿屋の秋の蚊帳かやかな

取りいでし去年こぞの裕あはせの

なつかしきにほひ身に沁しむ

初秋はつあきの朝

気にしたる左の膝ひざの痛みなど

いつか癒なほりて

秋の風吹く

売り売りて

てあか  
手垢きたなきドイツ語の辞書のみ残る

夏の末かな

ゆゑもなく憎みし友と  
にく

いつしかに親しくなりて

秋の暮れゆく

あかがみ  
赤紙の表紙手擦れし  
て

こくきん  
国禁の

ふみ  
書を行李の底にさがす日  
かうり

売ることを差し止められし

本の著者に

路みちにて会へる秋の朝かな

今日よりは

我も酒など呷あふらむと思へる日より

秋の風吹く

大だい海かいの

その片隅かたすみにつらなれる島島しましまの上に



秋の風吹く

うるみたる目と

目の下の黒子ほくろのみ

いつも目につく友の妻かな

いつ見ても

毛糸の玉をころがして

くつしたあ 鞆を編む女なりしが

えびいろ 葡萄色の

ながいす  
長椅子の上に眠りたる猫ほの白き

秋のゆふぐれ

ほそぼそと

そこそこ  
其処ら此処らに虫の鳴く

昼の野に来て読む手紙かな

よる  
夜おそく戸を繰りをれば

白きもの庭を走れり

犬にやあらむ

夜の二時の窓の硝子ガラスを

うすあか紅く

染めて音なき火事の色かな

あはれなる恋かなと

ひとりつぶや呟きて

夜半よはの火桶ひをけに炭すみそ添へにけり

真白ましろなるランプの笠かさに

手をあてて

寒き夜にする物思ひかな

水のごと

からだ身体をひたすかなしみに

ねぎ葱の香などのまじれる夕ゆふべ

時ありて

猫のまねなどして笑ふ

みそぢ三十路の友のひとり住ずみかな

きよわ気弱なる斥せきこう候のごとく

おそれつつ

深夜の街を一人散歩す

皮膚がみな耳にてありき

しんとして眠れる街の

重き靴音

夜おそく停車場に入り

立ち坐り

やがて出でゆきぬ帽なき男

気がつけば

しつとりと夜霧下りて居りを

ながくも街をさまよへるかな

若もしあならば煙草恵めとたばこめぐ

寄りて来くる

あとなし人ひとと深夜に語る

曠野あらのより帰るごとくに

帰り来きぬ

東京の夜よをひとりあゆみて

銀行の窓の下なる

舗石しきいしの霜しもにこぼれし

青インクかな

ちよんちよんと

とある小藪こやぶに頬ほほ白しろの遊ぶを眺む

雪の野やの路みち

十月の朝の空気に

あたらしく

息す吸ひそめし赤坊あかんぼのあり

十月の産病院の

しめりたる

長き廊下のゆきかへりかな

むらさきの袖そで垂れて

空を見上げる支し那人なありき

公園の午後

孩をさなご児の手ざはりのごとき

思ひあり



公園に来てひとり歩めば<sup>あゆ</sup>

ひさしぶりに公園に来て

友に会ひ

堅く<sup>かた</sup>手握り口疾<sup>くちど</sup>に語る

公園の木の間に<sup>ま</sup>

小鳥あそべるを

ながめてしばし憩<sup>いこ</sup>ひけるかな

晴れし日の公園に来て

あゆみつつ

わがこのごろの衰<sup>おとろ</sup>へを知る

思出のかのキスかとも

おどろきぬ

プラタヌの葉の散りて触<sup>ふ</sup>れしを

公園の隅<sup>すみ</sup>のベンチに

二度ばかり見かけし男

このごろ見えず

公園のかなしみよ

君の嫁とつぎてより

すでに七ななつき月来しこともなし

公園のとある木蔭こかげの捨椅子すていすに

思ひあまりて

身をば寄せたる

忘れぬ顔なりしかな

今日街まちに

捕吏ほりにひかれて笑ゑめる男は

マチ擦すれば

二尺ばかりの明るさの

中をよぎれる白き蛾がのあり

目をとちて

口笛かすかに吹きしてみぬ

寐ねられぬ夜の窓にもたれて

わが友は

今日も母なき子を負ひて

かの城址しろあとにさまよへるかな

夜よるおそく

つとめ先よりかへり来きて

今死にしてふ児こを抱だけるかな

ふたみ  
一二三こゑ

いまはのきはに微かすかにも泣きしといふに

なみだ誘さそはる

真ましろ白なる大根の根の肥こゆる頃

うまれて

やがて死にし児このあり

おそ秋の空気を

さんじやくしはう  
三尺四方ばかり

吸ひてわが児の死にゆきしかな

死にし児の

胸に注射の針を刺す

医者の手もとにあつまる心

底知れぬ謎なぞに對むかひてあるごとし  
死しじ児のひたひに

またも手をやる

かなしみのつよくいたらぬ

さびしさよ

わが児のからだ冷ひえてゆけども

かなしくも

夜よあ明くるまでは残りゐぬ

息いききれし児の肌はだのぬくもり





# 青空文庫情報

底本：「日本文学全集」2 国木田独歩 石川啄木集」集英社

1967（昭和42）年9月12日初版発行

1972（昭和47）年9月10日9版発行

底本の親本：「一握の砂」東雲堂書店

1910（明治43）年12月1日刊行

※冒頭の献辞と自序は、「啄木全集 第一巻」筑摩書房、1970（昭和45）年5月20日初版第4刷発行から、補いました。

※底本巻末の小田切進による注解は省略しました。

入力：j.utiyama

校正：浜野智

1998年8月11日公開

2017年10月30日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 一握の砂

石川啄木

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>